

学部向け英語スピーキング授業におけるインタラクションの分析 Interaction Analysis in an English speaking course for college student

坪田 康
Yasushi Tsubota

京都工芸繊維大学
Kyoto Institute of Technology
tsubota-yasushi@kkit.ac.jp

Abstract

This article presents an analysis in an English speaking course for college students. In the course, students practice speech repeatedly but the audience is varied at each practice. First, students make a speech in a pair work with a peer, then a group work with peers and observers from outside of the class, at the last, toward the other class members in front and an English speaker also joins the class via Skype as an audience. Audiences give feedback on the speech each time and student gradually gain confidence over their speech. The performance of the students are evaluated through the questionnaires and English speaking test

Keywords — Interaction, English learning, Speaking

1. はじめに

一般に、コミュニケーションにおいては、聞き手を分析し、相手に応じた話し方をするのがよいとされる。母語であればいつの間にか聞き手に応じた話し方ができるようになっていることもあるが、外国語では適切にできないことが多い。これは文法・語彙が十分でないということもあるが、相手を意識した発話練習をしたことがないことも理由のひとつであろう。共通の文化的背景を持つ学習者同士でコミュニケーションをする際には、言葉が足りなくても、聞き手が足りない部分を補ってくれるのではという甘えも存在する。多くの外国語の授業においては、皆が同じテキストを読んで会話の展開をおさえた上で、ロールプレイ型で演習をすることが多いが、これではどのように表現すれば誤解のない形で伝わるか、伝わらなかった場合の解決法を身につけることは困難である。

第二言語習得研究では、「理解可能な大量のインプットが言語習得を促進する」というインプット仮説 [1]・「アウトプットが言語運用の自律性を高める」というアウトプット仮説 [2]に加えて「コミュニケーション場面における意味のやりとりが特定の言語形式の習得を促す」というインタラクション仮説[3], [4]が提唱されてきた。[5]によれば、“第2言語学習者の言語知識の不足や欠陥のために生じた誤解を、学習者が対話者とのやりとりを通して解決していく過程で、第2言語の文法習得が促される”(p. 181)ことが大事であると指摘している。[5]での説明を下記に引用する。

意味交渉は、ネイティブ・スピーカー同士の会話でも頻繁に起こるものですが、話者の一方あるいは両方が第2言語学習者である場合には、その人の持つ言語知識の不足や欠陥のために意思の疎通に支障をきたすことも多く、意味交渉の必要性はさらに増します。(p. 182)

しかし、そこで効果的な意味交渉が行われれば、第2言語学習者は最終的には、対話者の意図することが理解できたり、自分の意図することを対話者にわかってもらえたりします。このような過程を経ることによって、第2言語学習者の内部で、ミスコミュニケーションの原因となった文法規則の習得が進む、と考えられているのです。つまり、意味交渉をすれば、必然的に、ミスコミュニケーションの原因となった文

¹ 意味交渉とは、会話の中でお互いの発話意図がうまく伝わらない場合に、お互いが理解しあえるまで、聞き返したり、意味を確認したりするやりとりのことである



図1 オーディエンスデザインを考慮したスピーキング学習モデル

法規則の「意味」と「形式」との関係が際立ち、そのことによって、第2言語学習がその関係に気づいたり、その関係について持っていた仮説を修正したりする、と考えられているのです。(p. 182)

これに基づけば、効果的なスピーキング学習とは、「同じ内容を何度も何度も繰り返しながら、フィードバックを受けて、自分の誤りを直していき、スピーキングスキルを高め、自信を深めていく」過程が有効であると考えられる。しかし、この方法だと同じ内容を何回も続けることになるため、緊張感が持続しづらいという問題がある。また、学習者は外国語発話に対して不安を抱いているため、自発的に多量の発話をさせるのは簡単ではないという問題もある。以上述べてきた問題意識に基づき、学習者が自信を深めていけるようなスピーキング活動を設計・実施した。その中で学習者がどのように成長していったかについて以下で述べていく。

2. 自信を深める英語スピーキング活動

筆者は東京工業大学で情報工学英語プレゼンテーションの授業を2011年度から実施してい

る。この授業の受講者は例年6～10名程度で、5日間の集中講義形式で実施している。学部向けの授業であるが、大学院生も参加する年もある。種々の形式のスピーキングを経験させるため、自己紹介(資料なし)、口頭発表(PowerPoint資料)、ポスター発表(PowerPoint資料1枚)、本の内容の口頭要約、スピーチ(資料なし)のアクティビティを実施している。

聞き手を変えながら練習し、自信を深めてもらうために、全ての活動で徐々に聞き手の人数や多様性に関連したオーディエンスのデザインをしている。受講者同士のペアワークから始まり、受講者と社会人が参加したグループワーク、Skype経由で英語話者をつないだ状態でクラス全員の前で発表する等である(図1参照)。毎回さまざまな聞き手からフィードバックが得られ、すぐに話す機会が与えられるため、フィードバックを効果的に活かしているようである。多くの聞き手に理解してもらえる経験を積むことで、学習者の自信につながっているようである。

3. 学習者の評価

3.1 記述式アンケートによる評価

2011 年度～2014 年度の授業で学生に記述式のアンケートをとった。以下では、主に、英語話者との会話に考え方が変化したかどうか、今後、同様の演習に参加するとしたらどのような感情を持つかの部分について報告する。英語スピーキングに対する苦手意識は払拭されているのが伺える。

問1. 今回英語話者と会話して感じたことや気づいたこと、考え方が変わったことはありますか？

回答例：

- ・言葉が出ないことは恥しくないということがわかって良かった
- ・緊張しなければ少しは喋れることがわかって、挑戦してもいいかなと思った
- ・相手の理解を確認するのが重要だと思った
- ・文法が正しくなくてもある程度伝わる。逆にアクセントが正しくないと伝わらない
- ・がんばって英語で話そうとするのが大事だと思いました
- ・話す努力をすることが大事だと思った

問2：来週同じような演習に参加することになった場合、どのような感情を持ちますか？初日と同じでしょうか？何か変わりましたか？

回答例：

- ・緊張はほとんど感じることはないと思う
- ・経験を活かしたい
- ・かなり緊張していましたが、次回があれば軽減すると思う
- ・当初よりも積極的に参加したいと思う気持ちが強くなった
- ・一週間とてもたのしかったので、初日よりはかわりました
- ・思ったよりも楽しく授業をうけることができた

英語話者と会話して感じたことや気付いたこと、考え方が変わったこと（2013 年度）

- ・英語を話すことは極端に難しいことではない。
- ・あんがい伝わる
- ・英会話は慣れが重要だと思った

役に立ったこと（2013 年度）

- ・たくさんの発表を行ったことで、発言することへのおびえがとてま少なくなりました
- ・自分で英語を話す経験と、他の人からコメントを得られたことが、自分の弱点の把握に役立った

参考：英語話者と会話して感じたことや気づいたこと、考え方が変わったこと（2011 年度）

- ・言葉が出ないことは恥しくないということがわかって良かった
- ・緊張しなければ少しはしゃべれることがわかって、挑戦してもいいかなと思った
- ・がんばって英語で話そうとするのが大事だと思いました
- ・話す努力をすることが大事だと思った

同じような演習に参加することになった場合、どのような感情を持ちますか？（2011 年度）

- ・当初よりも積極的に参加したいと思う気持ちが強くなった
- ・一週間とてもたのしかったので、初日よりはかわりました
- ・思ったよりも楽しく授業をうけることができた。

3.2 スピーキング試験を利用した評価

スピーキング能力の評価として、授業の初日と最終日に The Versant™ English Test を実施した。これは音声認識を活用した電話による全自動英語リスニング・スピーキング試験である。2011 年度から 2014 年度までの全ての授業でプリテスト、ポストテストとして実施した。結果を図 2、図 3 に示す。

28 名の受講者中、点数が下がったものが 3 名いたが、これは授業観察結果と直接の口頭イン

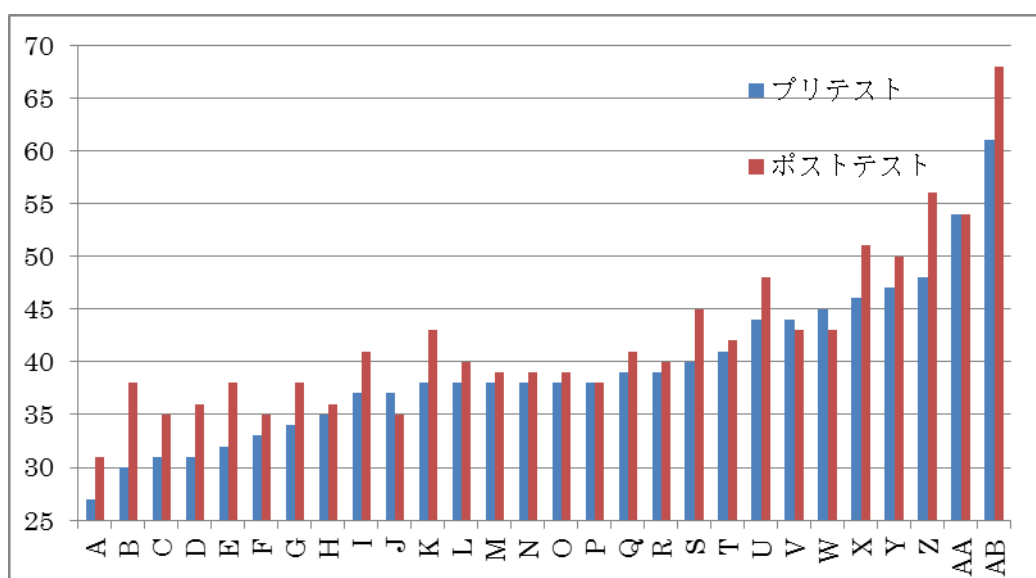


図 2.4 プリテスト, ポストテストの成績 (2011 年度から 2014 年度)

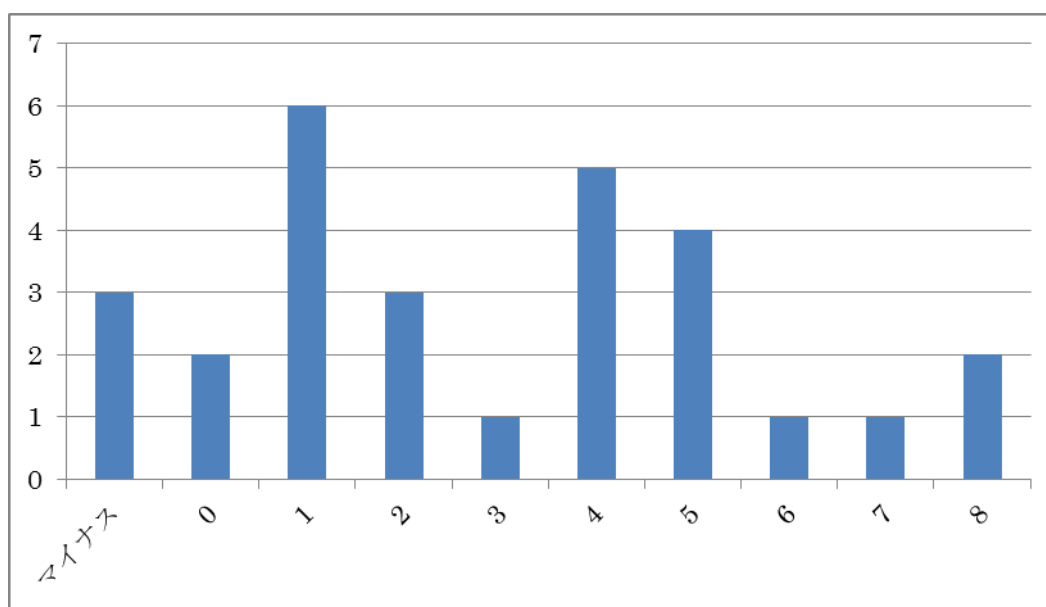


図 2.5 プリテスト, ポストテストの成績の差分 (2011 年度から 2014 年度)

タビューから総合すると、使おうとする構文や語彙の程度は上がったけれども、正しく文として発話できていないということが原因として考えられる。今後、録音音声などを分析していきたいと考えている。残りの 25 名の学生は点数が向上している。

The Versant™ English Test は非常に難しく、半年、一年の英語学習を経ても数点も点数が向上しないと言われている。また、標準誤差は 2.9 点であり、2.9 点を超える変化があれば客観的

に能力が向上したと言える。こうして考えた場合、大多数の学生にとって客観的にもスピーキング能力の向上に寄与できたのではないかと考えている。

4. おわりに

本稿では 1 週間の英語プレゼンテーションに関する集中講義を例にとり、学習者の主観的評価と成績の変化をアンケートとスピーキングテストを参照しながら考察を行なった。当日の発表では、それぞれの発表練習においてどのよう

なインタラクションが行われているか、どのような課題が残っているかについて、具体的な事例を交えて報告する予定である。

参考文献

- [1] Krashen, S. D.(1985), “The input hypothesis,” New York:Longman.
- [2] Swain, M. (1985) , “Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development,” In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition*, pp. 235-253, Rowley, MA: Newbury House.
- [3] Long, M. (1996). The Role of the Linguistic Environment in Second Language Acquisition. In W. Ritchie & T. Bhatia (eds), *Handbook of Second Language Acquisition*, 413-68. San Diego: Academic Press.
- [4] Long, M. (1988). Instructed interlanguage development. In L. Beebe (Ed.), *Issues in second language acquisition* (pp. 115-141). New York: Newbury House.
- [5] 羽藤由美(2006), “英語を学ぶ人・教える人のために「話せる」のメカニズム,” 世界思想社.